

『証言 沖縄スパイ戦史』

2020年06月08日

国内で唯一の地上戦となった沖縄戦に関して、子どもの頃は「ひめゆりの塔」、「健児の塔」、そして「沖縄決戦」などの映画を見て、悲惨な戦争の実態を知らされた。殊に、若い人たちが惨たらしい死を遂げていく映像に心が凍った。大人になってから、書籍を通して、本土決戦のために、捨て石として用いられた沖縄戦の事実を知らされた。戦争がもたらす途方もない犠牲を沖縄県民は負わされたのである。米軍艦隊から「鉄の暴風」と言われる「艦砲射撃」を浴びた。それは、緑がなくなるほどの激しさであった。米軍は上陸してから、日本兵を追い、南下した。多くの県民は守ってもらえると軍隊を頼って、一緒に南下した。そのため、県民が米軍の攻撃に晒されることになり、多くの戦死者を生む結果となった。県民の4人に1人が無残に殺されていった。沖縄戦の悲劇は、県民が都合よく兵隊に利用され、不都合な時は、惜しげもなく殺されたことである。食料を奪い、逃げ込んだガマから追い出し、泣く赤子を殺し、投降しようとする者を殺害する。兵隊は県民よりも自分たちを守ることに汲々としていた。極めつけは、集団自決（強制集団死）である。

神学校時代、沖縄出身の学生が数人いた。米軍が施政権を握っていたので、彼らはパスポートを持って、留学という形で神学校に来ていた。彼らから、沖縄戦の興味深い話を聞いた。① 艦砲射撃は本当に怖かった。② 日本兵より、米兵の方が親切で、優しくかった。③ 多くの県民は兵隊と共に南下したが、自分の家族は北に逃れ、助かった。④ 日本兵が中国でしたように、米兵から虐殺、凌辱されると言われ、それならば、自決しようとする多くの強制集団死が起こった。チビチリガマでは80数名が自決した。そのガマの数キロ離れた所のガマに、友人は家族と近隣の住民たちと身を潜めていた。ガマの中で、自決か、降伏かを話し合っていた時、ハワイ生活を経験した人がいて、米国人は残虐なことはしない、降伏しようとする主張し、その主張に従い、人々は命を得た。

沖縄戦に関しては、語り尽くされていると思っていたが、隠されていた事実が新たに発掘されている。ジャーナリストで映画監督の三上智恵氏がドキュメンタリー『沖縄スパイ戦史』（2018年制作）を発表した。2020年、ドキュメンタリーの基礎となった証言をさらに収集、収録し、『証言 沖縄スパイ戦史』を上梓している。新書版で700頁を超える大部の証言集である。仲間内で殺し合う凄まじい証言で、当事者たちは今まで、口をつぐんでいた。それを、三上氏が口を開かせ、ドキュメンタリーを作り、証言集にまとめたのである。「秘密戦」を叩き込まれた陸軍中野学校のエリート青年将校たちが沖縄本島の北部に赴任し、10代半ばの少年たちを「護郷隊」として組織し、秘密戦のスキルを仕込む。今で言えば、大学卒業の青年が中学生、高校生を集め、特殊な戦争を遂行したのである。目的は国体護持、本土決戦の時間稼ぎのためのゲリラ戦、スパイ摘発である。少年たちは戦争に協力できることに感激し、青年将校に純真に従った。米軍の進路遮断を狙い、橋などを爆破し、そのため、住民は避難路を失い、大量の餓死者や、マラリアの蔓延に襲われたりする。南下する米軍の背後で、攪乱させ、情報を取ることを目指し、住民を巻き込んだスパイ戦やゲリラ戦を展開した。住民同士が監視、密告し合い、疑心暗鬼の中、確かな根拠もなく、スパイ容疑で虐殺したり、されたりする。戦争は銃撃、爆撃だけではなく、影に隠れた陰惨な戦いもある。それが、70年間、闇に隠されていたのである。戦争の裏にある理不尽をあぶり出した彼らの証言を聞き、非人間化するスパイ、ゲリラ戦に恐怖を感じた。そして、この陸軍中野学校の「秘密戦」は本土決戦に備え、全国で展開しようとした作戦だったそうで、国体（天皇制）護持のためなら、国民の命は単なる消耗品だったのである。